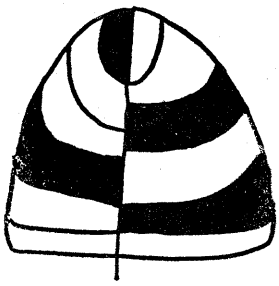
保育の雪月花

川崎千束



雪月花の本来の意味は四季折々に楽しむ好い眺めをいうのであろうが、私は保育に就ての所感を、雪・月・花とわけて、まず雪と思うことから書き進めてゆきたい。

雪　その一

銀嶺、雪明りなど俳句の季題になるような雅なものでなく、雪冷えと表現したい程の冷え冷えとした現実を直視すれば、助成金の使途が問題として浮上する。

法人幼稚園に附与される助成金は、園児の保育に必要なものを購い、且つ園で働く人々の福祉を目的として助成されるものと信じていたのであるが、学法幼の中には、助成金の使途不明の上に、〃理事長が勝手に使用してよい金〃と広言してはばからぬ設立者もあったりするので、この点を県の係官に質問すると「壱千万以上助成する園には係官が出向いて綿密に調査するが、それ以下の園へは人手不足で出向調査は不可能である。したがって領収証によって確認するのみ」との応答であった。なるほど、一ヶ年間に各園に出向き助成金の使途を調査するには、人手不足であろうことは合点かれるのであるが、私たち保育者はやむをえぬ

事情の為に人手不足に遭遇する場合がしばしばあるが、皆の協力と工夫とによってその欠落を補ってきている。それから考えれば県の係官の人手不足という弁も職務怠慢ではなかろうか。領収証だけで助成の金額と合致すれば良いというやり方も心もとない感がする。領収証は稍々もすると鯉を狸と書き誤り易い不安がある。その県では教職の免許状を持たない者は園長を許可しないという進歩的な県条令を示した程であるから、徹底して折角の親心である助成金が、まっとうに使用されるよう尽力を願いたいものである。一方法として（既にこの方法が採用されているなら更に強化して）理事会の議事録には各理事の印鑑でなく自筆の署名を、また必ず園長自筆の同意書を添付すると規定したなら、鯉を狸式の領収証より信頼がおけるのではないか。現行法だと雇われ園長には議事録はおろか、助成の金額さえ報告されずに事が運ばれている事実を体験している。私は今更過去になった非をあばこうとするつもりはないが「使途は理事長の勝手」という暴言がまかり通る体質が、流れるままになってしまうことを憂慮するものである。裏面の政治との結託、権威への盲従、そして大切な幼児たちや保育者にその皺寄せがくるという気運を幼児教育界からは追放したい一念からである。

その二

〝幼稚園の保育時間を延長して欲しいという希望が多くの母親から提起されている〟と、ある地方の園長から耳にした。結論から言えば私は反対である。

母親のアルバイト（住宅ローンの返済などのため）が、ますます増えつつあるのがその理由のようである。私自身職業を持っていたし、女性がその能力に応じて職場への進出も賛成であるし、男女平等論にも真向から反対はしないが、その平等は価値観から言うのであって、男女の性別によってその担う分野はおのずと違ってくると思う。女性には天与の子育てという誇らしい仕事が授けられていることを改めて考え直してみたい。

時々TVの自然のアルバムで鳥獣の世界の子育ての実況が映出されてその真剣さに胸打たれるのであるが、今年の花の頃、たまたま雀と四十雀との間に起った巣箱の争奪。巣づくりの涙ぐましきまでの努力を目のあたり見て、種族生存への執念に深い感銘をうけた。私は建前としては幼児

期には母親は家庭にあって欲しいと願うものである。それこそその為に政治的に助成の手が打てないものかと考える次第である。

子どもの施設というものは、オーエンの昔から母親の為に創設されたものではなく、紡績事業華やかなりし時代に、母親が働きに出てマンチェスターの街に浮浪する子どもが多くなり、その子等のために創設されたものであると聞き及んでいる。

幼稚園の保育時間を延長することによって母親はその分だけ気楽になろうけれど、子どもの疲労と情緒が不安定になるのを考えたことがあるのだろうか。ひるね、間食、たまに入浴の設備などがあって、保育園は生活の場としての条件が考えられているが、現在の幼稚園の殆どが前記の条件に叶う設備を持っていない。その保育園ですら私の身近な者の体験によると、

――子どもを保育園に預けていた頃、四時には必ず迎えに行った。我が子は母親の迎えを知ってチラと母の方を見るだけで遊びを続けているが、他の子たちが「小母ちゃん」と寄ってきて抱かれたがったり、手足をひっぱったりする。そんな中で我が子だけをどうしても連れ帰られず、一緒に遊んだり散歩に連れ出したりして、結局は五時になってしまったけれど――と述懐している。

この話をきいて保育園の子どもたちが、切ないまで母や家を恋う気持が推察され、幼い頃からあきらめの醒めた境地にあることがいじらしくなる。このことを母親たちは母心として理解しているのであろうか。

その三

幼稚園の保育時間延長の余波を保育園がうけて、現行の八時間保育を十時間保育に延長するような気運になってきているという。その事に対して保育園に働く人たちはけなげにも、〃八時間が十時間になっても致しかたがないが、せめて月一回、規定以外の休日が欲しい。自分たちはいつも忙しく働いているので働き人同志の横の連絡が不充分であるから、この一日を利用して子どもめいめいのことや保育のあり方を話し合いたい〃そう考えて規定以外の休暇を母親たちに諮ったところ、代表が民生局に出かけ陳情となった。

民生局の答は〃そんな身勝手な休暇はとらせられない。

若しそれを実施するなら助成金にもかかわってくる〃とのことだったとか。

想うに、民生局のお役人方は週休二日制などには見向きもされない勤勉家揃いなのであろう。

月　その一

雨露のめぐみとは、月の光にかかわるものであろうが、陽光のあまなき暖かさはない。

このほど東京周辺の私立幼稚園の中には温水プール増設を企画されはじめたと聞く。助成金の使途不明とは異り、園児保健の為にその金をあてられ、なお国民皆泳の視点からすれば結構なことであろう。が、幼稚園にそれを採入れるのは如何なものであろうか。省エネ時代であってみれば、温水プール使用後の保温は充分なのか、衛生管理、保育者の疲労等危惧されるものが多くある。日本は四季の感覚を豊かに肌で感じられる有難い国である。温水プールがますますビニールハウス栽培的人間を育てる温床にならないだろうか。それが杞憂にすぎなければ幸であるが慎重な配慮のもとに実行されんことを切望する。

その二

保育の月刊誌にはどうしてこうも挿絵が多いのかと不思議に思う。保育にたずさわる者は少くも短大以上の教育をうけている筈で、さし絵の補助を受けずとも内容の理解は容易であろう。深代惇郎氏は天声人語で、

廿代といえば体力だけでなく知力もまた絶頂のころ。あらゆる知恵が乾いた砂に水が浸み込むように頭に入る時期だ。人間いかに生くべきかを思うのは青春をおいては無いと。

若い保育者はおおむね廿歳代である。玩味すべき言葉である。さし絵の多いあり方は保育者を低俗視しているのではないかと僻みたくもなる。とあれ、立派な先生方の書かれた内容がさし絵のあることによってマイナスになる面は確かである。

花　その一

若い保育者がいきいきとした語調で、

「去年の運動会では鼓笛隊を編成したので随分苦労しました。第一子どもたちに可成りの苦労をさせました。それが今年はやらなくてもよい事になりました。私たちが皆で、子どもたちに無理がかかる実例を話し園長先生にお願いしましたら『――なら、止めましょう』と仰ってくださったからです」

その園の保育者は皆よく気が揃い保育のことも、ざっくばらんに話し合っていると前々から聞いていたから、この話もうなずけるし園長先生の断にも感心した。この園の園庭は子どもたちの登園する前に、いつも清々しく掃き清められていることと相関する話である。

その二

一年生になった母親からの報告である。

家庭訪問に来られた先生にA男が「テレビに映っているれんげ畑はすこしちがうよ。れんげの花はあんなにいっぱい咲いてないもの、葉っぱが多くその中に花があるよ」と言っていました。遠足でれんげ摘みに行ったのでよくわかっていたんですね。実際テレビに映出されると一面花だらけのように見えますものね。

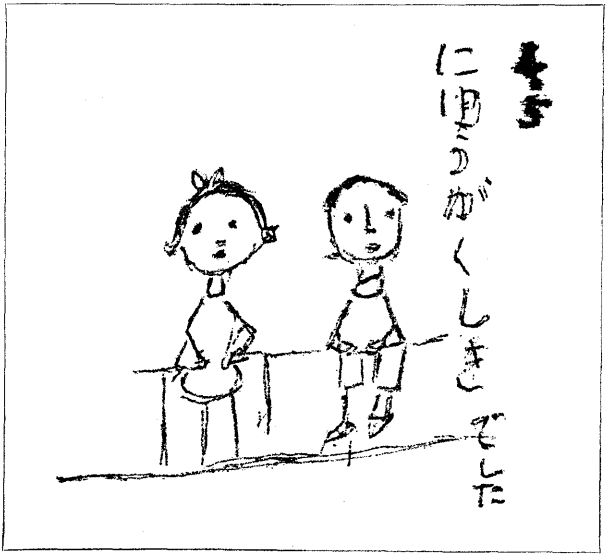
その三

台風一過の朝の路上で、みの虫が葉っぱに包まれたまま落ちていた。それを拾いかけた子に母親はあわてて「みの虫よ。ほら、うちの桜の木にもぶらさがっているでしょう。拾うのはおよしなさい」と制止の声をかけたら、「ちがうよ。朝のこの道は自動車がよく通るから轢かれると可哀そうだから、道の端に除けて置いてやるの」

その四

四歳の正月から欠かさず日記を書き続けている子の日記帖を見る機会があった。親たちの職業が文字に関係があるので、教えられもしないのに文字を書くようになったとか。年長組になってからは、漢字を書きたがり、自己流の音標式発案の字が書いてあるので、判読に苦労したが、それだけに興味もあった。

干柿を☆がき。横断を大だん。鬼ごっこをお2ごっこ。

今日を京。（京都に住んでいるので）給食を急。。。。（阪急デパートでおぼえた急の字）等々。

心ひかれたのは、保育園に在園中の絵日記には男の児とばかり遊んでいる絵なのに、入学式の日の絵は、俄然女の児と並んだのが描かれ、見るものをしてその緊張が伝ってくるほど神妙な表現である。入学という画期的なことと女の児と並んだことがよほど印象的だったのであろう。この子どもたちの新鮮な気持を小学校の先生はがっぷりと受け止めてもらいたいと思う。